

岩道開削の仏縁へ

文 中野 東禅

豊間根村の荒川に一人のマタギ（猟師）がいた。山で久しぶりに熊を見つけ、考える暇もなく仕とめた。近づいてみると、だがそれは熊ではなくて人間であつた。マタギはたまげておつかなくなり、とつさに死のうと思つた。だが次に、とにかく家の者に相談しようと思つた。家の人と話をし、生きるも死ぬも鞭牛さまにまかせようということになつて、鞭牛さまをたずねたのであつた。

鞭牛さまは、このマタギに言うのである。

「兎だどが、きじでも、殺生するつてごどハ、罪が深けごどだ。殺されるもののうらみや、殺すものの殺すごどをよるこぶ邪心がつもりつもつて、深け工業になつてぐんだ（なつてゆくんだ）。あやまつて人を殺したのも、その業のしわざだと思ふんだつともな（思ふんだがなあ）。ンだがらつて（だからといつて）、おめが死んでみだごで、業がきえるわけねべ（わけじゃないだろう）。業を鎮める道は、殺されだ人達を供養して、一切のものを生がすごどによつて、おのれを空にして浄めるごどでねべが。そすて（そうして）その空の心を、すべでのもののために手向けるごどだべな（ことだろうな）。なんじよだ（どうだ）、今おれがやつてる十三仏さまの建立を手伝わねが（手伝わんか）」

この一言によつて、マタギは鞭牛さまの十三仏を手伝うことになつた。それ以来陰となり日なたとなつて手足のように働く一人になつていつた。

十三仏を完成させ、妄想歌千首を詠みおえた宝暦六年正月、鞭牛さまは北川目に布引千手観音菩薩を造立した。

この年、田野浜の佐々木源衛門所有の大漁丸、神通丸が遭難した。貴重な良師たちを失ひ、浜の人々には飢饉の上に追ううちをかける悲惨なできごとであつた。鞭牛さまは、大沢の鈴木門助たちと談合して、遭難供養碑を建てた。

そのころ、代官所のある大槌町には、山間部から流入する飢渴人であふれていた。幽鬼のようになつた老若男女幼児たちが代官所へ物を乞ひ、追ひ払われると、今度は商家へ、大家へと乞ひ歩き、物かげといわず路地といわず入りこんでうずくまり、あらそい、物騒かつ異様な雰囲気になつていた。

財政能力を失っていた藩当局は、飢民救済の処置に困りぬいていた。そこで、地方分限者にその救済を命じたのである。そこで、地方分限者にその救済を命じたのである。大槌代官所管内では、吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛、舟越の佐々木源右エ門、山田町の与作など七名で合せて二千四百余名に穀物を与えていた。だが正月になると飢民の流入は一段と目にあまるものになっていた。

大槌通りの九カ寺の禅僧たちは、ついに行動をおこすことになった。飢民救済のための托鉢と施粥を行うことに決したのである。九カ寺は連名で許可願を代官所に提出した。許しは数日をまたずして下りた。こうして九カ寺の托鉢がはじまったが、商家や大身の家は多くの人をかかえているためか、先ゆきを案じて穀物の布施をおしんだ。菩提寺さんへの義理だてで、はじめはなんとか布施もあったが、施粥と聞いてむらがり集まる飢民の救済にはおいつかなかった。禅僧たちは足を棒にして歩き必死で説経した。だが、物を乞うだけの畜生のようなになった人々と、水でうすめた粥とのかけくらべをしてゆくうちに、僧たちはむなしい気持ちと、希望のないつかれへとおちこんでゆくのみであった。ただ、目の前にいる渴れた人々を何とかしなくてはという当座しのぎの使命感だけが彼らを支えていた。

こうして春までもちこたえて、それぞれの家や畑に帰れた人は何人いたであろうか。多くは大槌町とそのかいわいで、のたれ死んでいったのである。

この施粥のうわさは鞭牛さまもすぐに聞いた。

たすけあう仲間がふえたことを鞭牛さまとその仲間たちはよろこんだ。

春を迎え、新芽のふくころには生き残ったものは一息ついた。麦は何とかなりそうであった。麦さえ実りがあれば、次には豆がありそばがあった。秋には米がとれる。みんな希望がわいてくるのであった。

どこの村でもおいおいとおちつきをとりもどしてゆくにしたがい、次の問題がおこっていた。たねもみの不足と、人手の不足であった。村民は激減し、中には一家全滅の家もあった。川ざらえや、山の下がりや、藩の荷を運ぶ駅伝すけでんの助郷にしても人手が決定的にたりなかった。生きのこったものは老人も女も必死で働いた。その上に藩の助郷は今までになく負担であった。とくにけわしい岩道をもつ閉伊川筋の村々ではたえられなくなっていた。腹帯から川目にかけての難所をもつ川井村近在の人々はついでに助郷の免除を願い出るこ

とになった。

鞭牛さまは、こうした村人たちの声をきき、相談になってゆくうちに腹帯かいわいの道路修理を考えはじめていた。それは鞭牛さまの体の中からじみ出るように湧き上がるものであった。

洪水のたびに川井村と腹帯の間は、猿舞山から和井内村にぬけて三十キロも大廻りしていた。その道を改修拡幅してもあまりにも大廻りすぎた。鞭牛さまは閉伊川筋を歩き観察をはじめていた。

鞭牛さまの道普請の実跡と、関心の深さは心ある人々に伝わっていた。宝暦八年、腹帯村では、道路改修に鞭牛さまの教示をおおぐことになったのである。